Operation Raleigh News

Operation Raleigh DENSO

No.5

昭和60年(1985)2月5日(火)
毎月1回発行

●発行所　オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号
電話　東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

お帰りなさい／いってらっしゃい

1月18日帰国

第1・2陣の5青年
さわやか笑顔で帰国

成田空港、北ウイング、国際線到着ロビー、予定より15分程はやい。午後3時40分、JAL 001便の到着ランプが点滅し始めた。午後4時15分、税関審査を終え、5人の若者たちが現れた。

まっ黒に日焼けした、松井君、桃井君、戸上君、橋本さん、伊藤さん―彼らの表情に、長旅の疲れは見られない。むしろ〝何か〟をやり遂げて無事戻ってきたんだ、という各人それぞれの〝自信〟がさわやかな笑顔となって、キラメイている。

午後4時42分、特別待合室10号室で関係者によるささやかな歓迎会が開かれた。

「お帰りなさい」乾杯！

あいかわらず笑顔の彼ら。

こんなふうに笑っていられるのも、きっと長い航海が彼らに与えた強い精神力なのではないか。若者たちは、確実に自分の進む方向を見定め始めている。今日は彼らにとって到着ではなく出発なのだ。

そろって元気に帰国した5青年

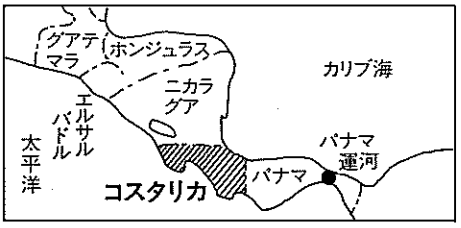
前橋・山内組
コスタリカへ

前橋宏美さん
(JP0010)

山内泰胤君
(JP0011)

第4陣としてコスタリカへ派遣される前橋宏美さん、山内泰胤君は2月14日成田から空路現地へ向かうことになっていますが、出発を前にしてその抱負を次のように語ってくれました。

前橋　海外経験はあるが、欧米人中心の集団に入るのは初めてなので、習慣、考え方の違いにとまどうかも知れない。その時、どう対処していくか、実際の行動でどこまで受け入れられるかを試し、自己を訓練する場としたい。甘い幻想ばかりを見ずに、厳しい気持ちで臨みたい。



山内　救急法の講習会や英会話に力を入れている。自然や動物が好きなので、調査が楽しみ。自然保護運動について英国人と日本人の考え方の違いを肌で感じてみたい。国際交流という課題に対しての不安はあるが積極的にチャレンジしたい。

オペレーション・ローリー日本代表派遣青年第１陣２名（ゼブ号乗組）と第２陣３名（Ｓ.Ｗ.Ｒ.号乗組）が同時に無事帰国しました。そこで５人の派遣青年たちに、次の項目で質問しました。

❶苦労したこと、つらかったことは？
❷異国人との共同体験で感じたことは？
❸航海で最も印象に残っていることは？
❹いま、一番やりたいことは？
❺次回のOR応募者への一言は？

第1・2陣 帰国レポート おみやし

冒険旅行の成果

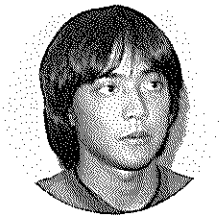
僕の内部で何かが変った ステキな生き方を教わる

松井直弘君
（JP0001・大阪府）
9月12日～1月18日まで桃井君とともに、第1陣として、ゼブ号に乗り、英国からバハマまで航海。

❶やっぱり船酔いがつらかった。頭はガンガンしてくるし、胃はキリキリ痛むし、もう立っていられないんです。寝ていても胃がぐっと胸まで持ち上ってくるようだし、でもね、そんな中でも星を見ることができたんだから、桃井君よりは症状は軽かったみたいですね。星と言えば、朝方に、南十字星が見えるんです。大西洋は、あたたかくて、まるでパラダイス。昼間の海はものすごく青くて、太平洋の寒さがウソみたいだった。ほんとに、つらい時もあれば楽しい時もあるんですよね。
❸僕達のリーダーです。彼は本当の海の男で、海を愛する気持ちがズンズン伝わってくるんです。南十字星を指さして「サザンクロス！」と叫んでも、顎髭をなでながら海を見つめていても絵になる人なんです。日本にずっといたら、気付かなかったであろう、違った生き方やステキな生き方を、彼から教わったような気がしますね。この四ヵ月で僕の中の何かが変わった、そんな気がしています。もう僕はボヘミアンの生活しか送れそうもありませんね。（笑い）

❹いもの煮っころがしが食べたい。船でチーズばかり食べていたんです。チーズから当分は離れていたいなあ。

苦しかった船酔いの数日 文化の違い話し合って友情へ



桃井和馬君
（JP0002・東京都）
松井君はじめ合計16名の仲間たちとともにゼブ号に乗って大西洋を横断。

❶船酔いですね、もうアレは苦しかった。一日目、二日目はまだ体力があるから、なんとか過ごせるんだけど、三日目になると手足までしびれてきてね。リンゴを見るだけで気持ち悪くなってくるんです。極端な話、水さえ飲めない状態なんです。それでも無理して塩水をガブガブ飲む。五杯飲んで四杯分は、吐いちゃう。で残りの一杯分でなんとか体を保つわけです。
❷まず最初に感じたのが、文化の違い。特にイギリスの人達にはとても批判的な目で見られていたんです。ほら、日本人って鯨を食べるでしょう。それが野蛮だってね。それで、壱岐のイルカ事件についてもさっそく文句つけられましたよ。どうしてあんなにイルカを殺したんだって…まあ、動物については日本だけで問題が起きているわけじゃないから、とことん話し合ってみよう、ということになって。松井君がオーストラリアのカンガルー問題をとりあげてくれたりして、でもその後にね、みんなと親友になれたんです。日本って単一民族だから、今までそんなこと考えてもみなかった。セブ号に乗らなかったら一生考えなかったんじゃないかな。

とにかく知性 対話を深める

❷僕はね、船の荷の、
にやったんだけどね、そ
とにかく体力、体が第
んて関係ない。そんな
の差が、歴然と表れる
ョックですよね。

❸体でぶつかればとに
なるんだ、っていう〝
分の自信にもつながり
ギリスで仲良くなった
ーヨークに到着した時
かな（笑い）あ、あと
行ってて、将来もそっ
思ってるんですけどね
業工程を自分で体験す
能率の問題点を自分の
できたこともありまず
に。（笑い）
❺僕、知性よりも体力
ど、やっぱり話せない
なんですよね。深くコ
きるって素晴しいと思
きるってことはやっぱ
んだ。英語、勉強して

ドは大きな自信

うりあり

より体力
は英語力

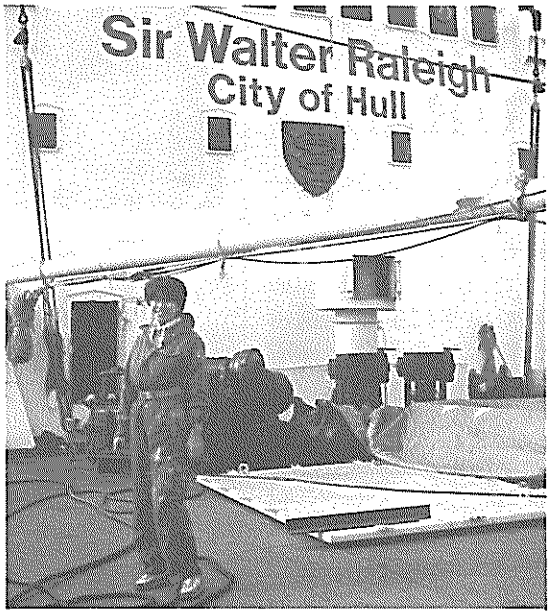
上 忠 顕 君
P0003・三重県）

として、旗艦S.W.R.
乗り、英国から米国
アミまで航海。

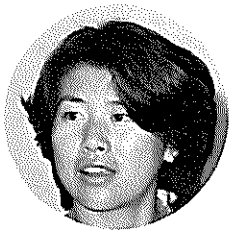
り込み作業を中心
な力仕事ってね、
ですよね。知性な
外国の人との力
です。やっぱりシ

く何でもなんとか
ハ〟。これは、自
した。そして、イ
り子からね、ニュ
手紙が来てたこと
僕は商船大学に
方面に進みたいと
今回の航海中の作
ことで、いろんな
目〟で見ることが
こっちはまじめ

なんて言ってるけ
（英会話を）ダメ
ュニケーションで
それに英会話で
最低必要な条件な
てくださいね。



地獄のエンジン室にも愛着
外国人にとって日本は神秘の国



橋本かおりさん
（JP0004・群馬県）
S.W.R.号に乗組み。出航式ではチャールズ皇太子の乗船署名に立合う。

❶ボロボロの船を一から直したんですよ。ペンキ塗りからはじまって…、でも、おかげで船がどういうふうにしてできてるか、よく解かりました。とにかくつらい、というかもうやだ、と思ったのがエンジンルームです。暑くって汚ないし、一日四時間、そこに詰めるんです。オーバーオール着てね。プロのエンジンマンが実際の仕事はしてくれるので、私達は4時間ずっと座ってるんです。あの4時間はまさに地獄でしたね。（笑い） 読書でも、と思っても暑さで本が溶けてしまいそうだし！でもね、最後にはエンジンに愛着が湧いちゃうから…不思議ですねえ。

❷そうね、みんなけっこう日本をミステリアスな国として見てるのよね。だからその部分に非常に興味を持っているみたい。そして、そんな日本に行ってみたい、と思ってる人々が多いことにも驚きました。

❺みなさん、こんなに体の小さい私でも、無事帰ってきました。この、体力維持の源は、とにかく何にでも興味を示して、そして、よく食べることです！（笑い）

●ゼブ号の航路

10/14サザンプトン→10/24プリマス→11/4ラコルマン→11/13リスボン→11/18ビラモア→12/1サンタクルーズ→12/25アンティグア→1/3グランドターク→1/12バハマ

●S.W.R.号の航路

11/13ハル→11/16ジャージー→11/17ギャンシー→11/19パルモス→12/6ニューヨーク→12/8ノースカロライナ→12/20マイアミ→12/21アパーハム

精神的に苦しかった〝言葉の壁〟
友達がたくさんできた

伊藤由樹子さん
（JP0005・東京都）
戸上君、橋本さんとともにS.W.R.号に乗組み。出航式ではチャールズ皇太子と同席し昼食。

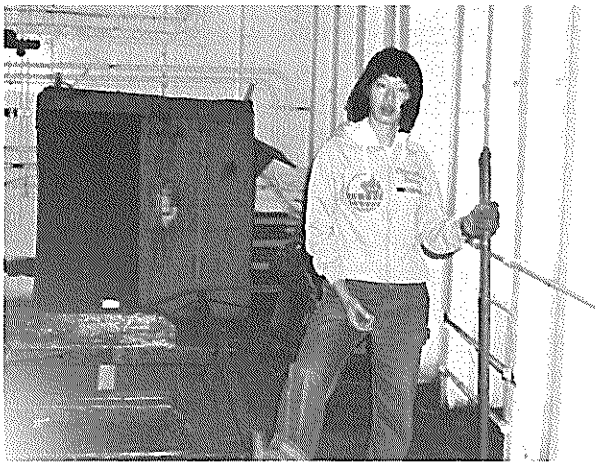
❶そうですねー 労働なんかは、たいへんといえばそうでしたけど…でも精神的に苦しかったのが、言葉の〝壁〟ですね。いろんな議論をしてもやっぱりそこで、わからなくなってしまう。そんな限界を感じました。

❷私、今回が初めての海外で、いきなり何ヵ国もの人種の違う人々と、行動を共にしなければならなくって… はじめ驚いたのは、やっぱり彼らはみんな、自分の主義、主張を持っているということ。

❸いろんな人に会えたこと。自分と心が通じ合ったり、通じ合わなかったり、ね。そういう人もいるんだ、っていうこと自体、発見でしたし。友達はたくさんできましたよ。ほんとに…。

❹はやく友達に会いたい！会って今の気持ちを伝えたいの。

❺やはり英語ね、会話をうんと勉強してくること。もっと話せたらな…と、何度自分の不勉強さをくやんだことか。



日本代表派遣青年のページ

密林で動植物調査など コスタリカ・プロジェクト

ＯＲ日本代表として、コスタリカのプロジェクトには前橋宏美さん、山内泰胤君が参加しますが、コスタリカでのＯＲ活動には、次のようなものが計画されています。

〔科学活動〕

- 高地における土壌分解と栄養調査、低地雨林における植物学調査。
- 高地における蝶の群れの調査。
- 草食性昆虫の調査・研究。
- 熱帯雨林の花の総合調査。
- ツタなど着生植物に関する調査。
- 雨林性両せい類（カエルなど）の生態の比較研究。
- 雨林の動物の声や地方の人々の方言の調査。
- 雨林のシダ類の調査。
- 前コロンビア人遺跡の発掘調査。
- サンゴ礁の沈下の影響調査。

〔奉仕活動〕

- ドレイク湾地域のキャンプ場づくりや橋梁建設技術指導の手伝い。

〔冒険活動〕

- コスタリカの最高峰で、太平洋と大西洋が一望できるチリポ山（標高約3,900m）への登山。

第3陣の大見君 バハマから第一報

ＯＲ第３陣のメンバー、堀内一秀君、大見則親君、小俣博泰君、戸崎肇君の４人は12月中旬から３月初旬の予定でバハマ諸島のプロジェクトに参加していますが、彼らから現地到着後初の便りが届きました。その内容をご紹介しましょう。

「マイアミに着いてから、ほとんど毎日パーティという日々を送りました。ほとんどの人は日本人に対して好意的で、われわれの英語がダメでも聞いてもらえます。とくにカナダ人のクレーンという男は、いいやつで、われわれが困っているときには学校で習ったような英語で説明してくれます。われわれ４人は彼に感謝状を贈りたいほどありがたく感じています。

実際のプロジェクトですが、堀内君はキャット島で洞くつ探検、戸崎・小俣君はターク・ケイコス隊と合流、私（大見）は測量に従事することになりました。」

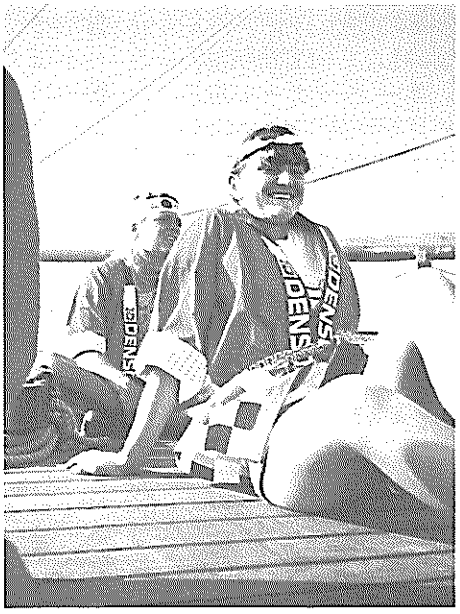
ABC放送が 全米にOR紹介

昨年12月10日、S.W.R.号がニューヨークに寄港したとき、全米をネットしているＡＢＣ放送のグッドモーニングアメリカで、Ｓ.Ｗ.Ｒ.号が取材され、生中継で全米にＴＶ放送されました。取材にはスネルＯＲ本部副議長、日本代表の橋本かおりさん、米国代表のクリス・ベンセン君が応じＯＲの主旨説明や応募動機、大西洋航海の様子などについてインタビューに答えました。

Operation Raleigh
DENSO
オペレーション・ローリー＆日本電装

大人気を呼ぶ ハッピーウェア

ゼブ号、Ｓ.Ｗ.Ｒ.号に乗組んだ各国の参加者たちの間で、日本電装が提供したハッピが大人気。「ハッピーナイトウェア」としてひっぱりダコだということです。日本のきものを連想し、エキゾチックなイメージを感じての人気のようで、現地への発送依頼も届いています。



写真はゼブ号で

事務局NEWS

ゼブ号船長の便り

帆船ゼブ号のニック・ブロートン船長から便りがありましたので、ご紹介します。

「親愛なるＯＲ協力者のみなさん。帆船ゼブ号は21日間で大西洋を渡りクリスマスの日に西インド諸島のアンティグアに到着しました。日本電装の協力で参加した桃井君、松井君を含む16人の冒険者たちは、生涯の想い出となるような数多くのエキサイティングな体験を積みました。とりわけ、英国、香港、米国、豪州からの若者たちと親しくなったことは彼らにとってすばらしいことでした。

われわれは、いまアンティグアを離れ、700マイル北のターク・ケイコス島にいます。ＮＤマーク入りの帆は、スペイン、ポルトガル、カナリア諸島、アンティグアなど、どこでも偉風堂々としています。英国、ポルトガル、カナリア諸島の新聞では一面で紹介されました。

みなさんの協力に感謝します。またお便りします。ゼブの乗組員と冒険者たちより。」